

シャルラタン考

蔵持不三也*

Sur le charlatan

Fumiya Kuramochi*

Abstract

Du moyen âge aux temps modernes, la France connut un essor considérable des vagabonds auxquels l'on donnait différents noms “charlatans”, “opérateurs” ou “empiriques”, etc. Ils traitaient les malades, arrachaient des dents ou vendaient diverses drogues ou remèdes (orviétans, thériaques ou mithoridats) sur la place publique ou au cours des fêtes foraines. Comme ils œuvraient sans autorisation ou en se servant de faux, ils faisaient usage de boniments pour tromper leur public ou cherchaient à l'allécher par la présentation de comédies jouées par les comédiens italiens ou français de compagnie. Sur dénonciation des médecins, des chirurgiens ou des apothicaires légitimes, les autorités locales leur interdirent à maintes reprises l'exercice. En vain, leur popularité ne fit que s'accroître.

Le but du présent travail est d'éclaircir, à travers l'étude de deux personnages célèbres, Mondor et Tabaran, qui tous les deux vivaient à Paris au cours du 17^e siècle, la signification historique et la fonction contre-culturelle que revêt ce phénomène en France. En effet le charlatanisme jouait non seulement un grand rôle dans l'évolution du théâtre et de la littérature françaises, il conférait aussi et en même temps à donner plus de place aux atmosphères festives dans la société urbaine, et à moderniser la médecine et la pharmacie en France.

* 人間健康科学科

* *Department of Human Health Sciences*
(*Département des Sciences de Santé Humaine*)

はじめに

歴史の風景にはつねに祝祭的な人々がいる。正統な社会の身繕いから逸脱し、逸脱することで自らの負性の生を営み、その周囲に嘲笑や裏返された笑いを産み出す人々。たとえば、中世から近世にかけてフランスを初めとする西欧世界で活動した、一般に《シャルラタン》と呼ばれる人々がそうである。彼らはまず医者であり、薬剤（調剤）師であり、興行師であり、抜歯人でもあった。都市の広場や大市や祭りに、つまり人の蟄集があるところならどこにでも姿を現し、随分と怪しげな施術を行い、あるいは仮設の舞台で、同道した役者たちに喜劇や軽業を演じさせて客を集め、巧みな口上ほどには効果のない万能薬や解毒剤を売りつけた。時にはまた、虫歯に悩む者を舞台に上げ、見物人が固唾を飲んで見守る中で、さも大仰に無痛の抜歯芸を披露したりもする。

しばしば医師（内科医）や外科医、あるいは薬剤師の組合から、さらには「患者」から告発され、投獄の憂き目に逢うこともあったが、いったいに彼らは医業に関する該博な知識の持ち主であり、それに基づく手練手管は、しばしば「専門家たち」を顔色なからしめるほどだった。そんな彼らの問題はただひとつ、いずれもが無鑑札だということろにあった。

しかし、そこはしたたかさを最大の武器とする彼らである。無鑑札を正統と信じこませることなど、さほど造作のない所業だった。たとえば、一枚の紙切れに国王侍医や参事会の名を騙って署名し、これに輝かしい、だが針小棒大の手柄話を付加するだけで用は足りた。いかさま師あるいは詐欺師。ありていにいえばそうなるだろう。とはいえ、そこで真に問われるべきは、これほど容易に詐称できる正統な鑑札（免許）制度自体の方だった。いや、大方が目に一丁字ない一般民衆の側からすれば、鑑札の有無など何ほどのことでもなかった。大事なものは、もとより目の前の苦痛を癒してくれるかどうかが問題であり、それすら叶えてくれさえすれば、正統であれ何であれ、択ぶところはなかった。

ことほどさように、彼らシャルラタンたちは正統と「異形」との虚実皮膚の間を鵠のようにうごめいた。そして、持ち前のトリックスター性にフ

リークさを重ね合わせて身につけていた彼らは、独特の遊行精神によって定住的な社会に闖入し、日常性と正統性を攪拌してその危うさを露呈させ、多くがまたいずこともなく去っていく。

法は違犯するためにあるとは、「呪われた思想家」ジョルジュ・バタイユ一流のアフォリズムだが、まさにシャルラタンたちは、こういつてよければ卓抜した違犯者であり、異能者でもあった。いや、彼らにとって異能と詐欺とはほとんど同義だった。あるいはこの独特の用語法に、道化という一語を加えてもよいだろう。事実彼らは、行政当局から繰り返し出されるシャルラタン禁令を巧みに潜り抜け、違法と遵法の、日常と非日常の、正統と異貌の、そしてむろん正気と狂気の境界を際限なく拡大して引き寄せ、大衆の真っ只中でそれをしばしば見世物仕立てで演出するという、すぐれて道化的な手法を自家薬籠中のものにしていった。すなわち、その多分にいかがわしい医術や薬学を見世物化し、「患者」を観客にまつりあげ、さらに人々の侮蔑や嘲笑を格好の台本として、社会と秩序を自らのしたたかな、時にはグロテスクなまでのイマジネールのうちにかからめとる。からめとって過不足なく近代を祝祭化し、社会秩序を支える「正統」の脱聖化と戯画化を図ったのだ。

本稿は、なぜかこれまで研究対象の埒外におかれていた⁽¹⁾そうしたシャルラタンのうち、とくに17世紀のパリを中心に活躍した奇才2人に焦点をあて、彼らの異形的世界を垣間見ようとするものである。本論に入る前に、まず基本的なシャルラタン像を確認しておこう。

I. 「シャルラタン」を巡って

定説によれば、シャルラタン (charlatan, ciarlatan) の語源とされるイタリア語のチャルターノ (ciarlatano) は、イタリア中部ウンブリア地方の町チェルレト・ディ・スポレト (Cerreto di Spoleto) に由来するチェルレターノ (cerretano、字義は「チェルレト出身者」) から派生したものだという⁽²⁾。中世に、この村が薬の行商人を多く出したことによる。後述する「シャルラタンの王」タバランは、さらにこの語をいずれも「物真似する者」を指すギリシア語のケイロノモイ (keíronómoi) や、ラテン語のゲスティ

クラトールス (gesticulatores)、あるいはルディオネス (ludiones) に由来するとしているが⁽³⁾、むしろこれは「職業」としての系譜であり、語源ではない。

シャルラタンという語自体は、プルタルコスの翻訳者として知られるジャック・アミヨ (1513 - 1593) が、1567年に著した『著名人たちの生涯』⁽⁴⁾に初出するという。だが、それよりも前に、フランドルの医師コルネイユ・バット (1449-1517) が、弟子ブルゴーニュ公アドルフの教育用に編んだ『世界点描』に出ているとする説もある⁽⁵⁾。しかし、当然のことながら、フランス国内に限ってもすべて同一呼称が用いられてきたわけではなく、地方によって多少なりと変異がみられる。たとえば西部のサントンジュ地方ではシェレタン (cherletan)、南西部のカタロニア地方ではハルロター (xarlotá)、東部のサヴォワ地方ではサルラタン (çharlatan)、南部のアヴェイロン地方ではショルロトン (chorloton)、さらにニース一帯ではチャルラタン (ciarlatan) と呼ばれていたという⁽⁶⁾。また、南仏のヴォークリューズ地方では、山地サン＝ロマネの住民たちを、おそらくはその騒々しい話し方や声からシャルラタンと呼んでいた、とする説もある⁽⁷⁾。

このようにみてくれば、シャルラタンなる語とそのイメージが、時代の前後を捨象して考えれば、ほぼフランス全土で用いられていたことが分かる。だが、それはおそらく当初から負の意味を帯びていた⁽⁸⁾。同様の事情はラテン語圏のみならず、英語やドイツ語についてもいえる。すなわち、charlatanなる語は、いずれも「いかさま師、山師、偽医者」などを指す quack (-doctor, -medicine) や Marktschreier と同義に用いられてきた。

事実、フランス中部ボワティエ生まれの文学者が生地の人頭 (市長) もつとめた出版業者のギヨーム・ブシェ (1526-1606) は、フランソワ・ラブレールの弟子たちを相手に見立てた対話の書『レ・セレ』 (1584年) の中で、「ローマ法が……きちんと遵守されていれば、偽医者やシャルラタンはこれほどはびこったりはしなかっただろう」と嘆いている (II, 217)。魔女弾劾でも勇名を馳せたあのジャン・ボダン (1530-1596) もまた、近代の国家・主権論を方向づけたとされる『共和

政六書』、いわゆる『国家論』 (1583年) のフランス人の体質に関する一節で、シャルラタンをこう論じている⁽⁹⁾。「つまり、すべての偉大な雄弁家や立法者、法律家、歴史家、詩人、道化師、サルラタン (sarlatan)、さらに巧みな弁舌と美辞麗句によって人々の心を誘惑する者たちは、(フランス社会の) ほぼ中ほどに位置するのである」 (丸括弧内蔵持)。

さらに、フランドルの領主で外交官・文学者としても名声を博し、カルヴァンにも近かったフィリップ・ヴァン・マルニクス (1548-1598) も、1589年に著わした『キリスト教と教皇絶対主義との差異表』で、シャルラタンを詐欺師と同一視している。

ところが、言語の社会的用法を通して習俗や信仰、思考などの展開を研究した、人文主義者のエティエンヌ・パキエ (パスキエとも。1529-1615) となると、シャルラタンのイメージは一気に拡大される。すなわち、死後1世紀以上経った1723年に刊行された『書簡集』の中で、「宮廷シャルラタン」の無知さ加減を嘲笑っているが、そこでは無能力かつ無責任な宮廷人までもが、シャルラタンとして侮蔑の対象となっているのだ。では、派生語はどうか。興味深いことに、特定集団ないし人物を指す名称として、シャルラタンはじつに多様な派生語を有している。それらをW・フォン・ヴァルトブルクの『フランス語源辞典』に依って文献初出順に並べれば、おおむね次のようになるだろう (一部筆者修正・補足)⁽¹⁰⁾。

1536年	charlatan 「シャルラタン」
1560年頃	シャルラタニゼ charlataniser 「シャルラタンのように偽る」
1573年頃	シャルラタネ charlataner 「シャルラタンを営む」
1575年	シャルラタヌリ charlatanerie 「シャルラタンのような手口、騙り」
1575年	シャルラトゥリ charlaterie 「シャルラタンの手口、話」
1576年	サルラタン sarlatan 「シャルラタン」
1580年	シャルルタニスク charletanisque 「シャルラタンに由来する」
1586年	サルラタヌリ sarlatanerie 「シャル

- ラタンの話」
 16世紀末 シャルラテcharlater「シャルラタンを営む」
 1718年 シャルラタネスクcharlatanesque「シャルラタンに関わる」
 1732年 シャルラトゥヌcharlatene「女性シャルラタン」
 1750年 シャルラタニスムcharlatanisme「シャルラタンの気質、言動」

これら派生語の具体的なし辞書的な字義は、「シャルラタン」の部分で「山師、いかさま、詐欺、詐称、欺瞞、欺弁」といった意味に置きかえれば容易に得られるだろう。さらに地方語における派生語を加えれば、このリストはおそらく何倍にも膨れ上がるはずである。語彙自体の広域性については、彼らが諸国を経巡ったということで理解できるとしても、これほどの造語力はいったい何に由来するのか。おそらくそれは、シャルラタンのなるものが民衆生活の中に深く浸透していたことを端的に物語っているはずだが、それにしても、なぜ17世紀の造語がない、もしくは極端に乏しいのか⁽¹¹⁾。今は疑問として指摘するほかないが、ともあれ現代フランス語における「シャルラタン＝いかさま師」というネガティブな字義は、こうして16世紀後葉から17世紀前葉にかけてほぼ完璧にできあがっていたことになる。

たとえば、1622年にパリのドゥニ・ラングロワなる書肆から刊行された小冊子のシャルラタン論駁書、すなわち『シャルラタンの起源や習俗、詐欺、詐称についての陳述』⁽¹²⁾は、匿名の著者(I.D.P.M.O.D.R.)——おそらくジャン・デゴレス——によるものだが、その冒頭にはこう記されている。

最初に、私はシャルラタン(ciarlatan)という語を、イタリア人がサルティンバンコ(saltimbanco)と呼ぶ者たち、大道芸人、道化、口上(呼び)売り、さらに広くは公共の広場で、台の上に乗り、あるいは地面に立ったり馬にまたがったまま、夥しい偽りの確約を並べて言葉巧みに薬の効能を称え、さらに無数の驚異譚を語りながら、しかじかの疾患を治すために調合

されたという内服薬や軟膏、油脂、粉末を売る、他のすべての者たちを指すものとして理解している。

薬・(仮設)舞台・芸人・口上……。ここには明らかにシャルラタン一般を規定する外的要素が列挙されている。そして、これにいかがわしさという内的要素を加えれば、シャルラタンの全貌を語ることになる。いささか前書きが長くなったが、ここで本論に入ろう。

II. 「金の山」モンドール

お前はシャルラタンや巾着切り、はたまた偽兵士たちの約束の場所か、軟膏や湿布薬売りのたちが商売する常打ちの芝居小屋たるポン＝ヌフよ。お前の上には抜歯人もいる。古着屋や本屋、銜学者たちもいる。新曲の歌い手や淑女相手の女衛たち、加えて陰の商売の親方も、オペラトゥールや科学者も、さらには錬金術の医者たちすらいる。

17世紀の詩人ベルトは、『ビュルレスク詩によるパリの町』の中で、当時流行していた卑俗文体を駆使して、パリの心臓部とでも呼ぶべきポン＝ヌフ橋をこう描いている⁽¹³⁾。竣工1606年という、セヌ川にかかっている現存の橋の中でもっとも古い歴史を有しているにもかかわらず、なおも「新橋」と呼ばれるこの石橋は、中の島であるシテ島をセヌ両岸と結び、橋上家屋がなかったため、完成当初から多くの人々が足繁く行き交う場となっていた。1614年には、4年前に狂信的なカトリック教徒カヴァイヤックに暗殺されたアンリ四世の騎馬像が、橋の中ほどの西側張り出し部に据えられた。制作地はトスカーナ地方リヴォルノ。そこから水路パリに運ばれたものである(この像は1792年、大革命の際に解体されたのち、1818年にルイ十八世によって再建されている)。

以後、全長270メートルあまりのポン＝ヌフ橋は、パリの、いやフランス全体の重要な歴史的事件の舞台となる。たとえば、アンリ四世の葬列はここを通り、騎馬像に最後の別れを告げている(1610

年)。また、幼いルイ十三世の摂政だった母后マリー・ド・メディシスの格別の寵愛をよいことに、放蕩三昧に明け暮れて周囲の反撥を買い、ついにルーヴル宮で暗殺されたフィレンツェ生まれの山師アンクル侯爵、本名コンチーノ・コンチーニの遺体は、まさにこの橋の上で民衆に凌辱・解体され、その肉片の一部が騎馬像の下で焼かれ、食べられている(1617年)。17世紀中葉のフロンドの乱ではここが主戦場となり、1721年に、グレーヴ広場(現パリ市庁舎前広場)で車裂きの刑に処された稀代の大泥棒カルトゥーシュが、徒党を組んで大暴れし、パリ市民を恐怖の底に突き落とした舞台もここだった⁽¹⁴⁾。さらに、1789年7月14日には、武装した革命軍が数門の大砲とともにこの橋で堂々の行進を繰り広げ、勇躍バスティーユ牢獄へと向かっている。ナポレオンの即位式を祝う行列(1804年)や、ルイ十八世のパリ入市儀礼(1817年)も、やはりここで営まれている⁽¹⁵⁾。

こうした歴史的事件の一方で、ポン＝ヌフ橋はジャック・コロを初めとする多くの画家たちに画想を与えただけでなく、庶民生活のまたとない場でもあった。国王ルイ十三世から橋上での組立て式露店設営が正式に認められるようになるのは、リシリュウ実権下の1640年頃である。だが、実際にはそれ以前から、前述の詩に謳われているように、きわめて雑多な立売り人が見られた。加えて、花売りや野菜・果物売りはもとより、いささかわ変わったところでは、キリスト受難劇に代表される聖史劇(らしきもの?)を演ずる役者たち、のちに「ポン＝ヌフ」と呼ばれるようになる卑猥な歌を得意とする歌い手、砒素の入った箱を抱え、竿の先にネズミの死骸を数珠状に吊して、「猫いらず」と叫ぶ殺鼠剤売りらの姿もあった⁽¹⁶⁾。しばしばオペラトゥールとも呼ばれるシャルラタンたちにとって、首都でもっとも殷賑をきわめるここは、文字通り晴れ舞台にほかならなかった。

前述したアンクル侯爵の遺骸が引き千切られた翌1618年のある金曜日、このポン＝ヌフ橋とドーフィネ広場の間に、市民たちの時ならぬ人垣ができる。突然、そこに舞台が建ったのだ。むろん、急ごしらえの代物であってみれば、セーヌ右岸中央市場界隈のモーコンセイユ通り(現、エティエンヌ＝マルセル通り)にあり、当時、パリで唯

一の常設劇場だったオテル・ド・ブルゴーニュ座のような豪華さとはまるで無縁。屋根はなく、取りたててセットらしきものも見当たらず、ただ板敷きの舞台に後幕を張っただけの粗末な、つまり大道芝居用のいかにもありふれたバラック風「劇場」だった。

だが、物見高いパリッ子たちにしてみれば、建物の様子より、これから何が始まるかという期待と、そこに人が集まること自体に関心があった。もしかすると、前年、契約上の問題でオテル・ド・ブルゴーニュ座から撤退し、以来消息を絶っていた——おそらく旅回りをしていた——当代きつての喜劇三羽鳥、すなわちグロス＝ギヨームやテュルリュパン、さらにはゴートイエ＝ガルギュユが舞い戻ってきたのか。

そんな見物人たちの期待と好奇心が十分高まるのを見届けるようにして、ようやく開演の運びとなる。時間は午後。まずはヴィオールとレベッカ(中世からルネサンス期にかけて用いられた3弦の擦弦楽器)の演奏である。あるいは、コメディ・イタリエンヌ(コンメディア・デラルテを指すフランス語の通称。字義は「イタリア喜劇」)⁽¹⁷⁾の役者たちによる、ロマン・コミック調の客寄せ芝居が演じられたかもしれない。ともあれ、お世辞にも上手いとはいえない弦楽器の音に促されるかのように、やがて舞台に、立派な白髭を生やし、金ぴかの衣装に身をかためた男がひとり、長い髪を揺らしながら姿を現す。パリッ子たちには初見参だが、男が仰々しく名乗った名前はモンドール(MondorないしMontdor)。意味は「金の山」(Mont d'Or)である。一説には、国王の解毒医で、医学博士の免状ももっていたという⁽¹⁸⁾。

さて、お立会い。かくも賑々しくまかりこしましたる私めこそ、名はモンドールにて、生まれはウンブリアの名高きチェルラート。サレルノの大学にて医学と薬学を修め、かたじけなくも医業の免許を得て諸国を巡り、ここもと持参いたしましたる天下の妙薬オルヴィエタンにて、上は国王・諸侯から、下は庶民にいたるまで、あまたの病人をたちどころに治し、恥ずかしながら、当代きつての名医として赫々の名望をほしいままにしております。

このたび、念願かなって初めてパリの都に上り、皆様方に、いかなる難病も退ける奇蹟の妙薬をとくと知っていただきたく、神もご覧あれ、法外なる安価にてお頒けする次第。とは申せ、何分にも希少な霊薬。わが一族にのみ代々伝わる秘薬中の秘薬であれば、無尽蔵にあるそこらのものとはわけが違う。売れば、もとよりそれまで。早い者勝ちと思し召せ。得て天国、得ざれば地獄、見るだけなら煉獄の試練！ いずれをよしとするかは、皆様方の心一つ。さてもお立会い・・・。

「モロカン（モロッコ人）」と呼ばれる召使に命じて、舞台の袖に恭しく置かれた長持ち風の薬箱から、評判の高い万能薬オルヴィエタン（オルヴィエターノ）を取り出し、自慢の髭を撫でながら、おそらくモンドールはこんな口上で見物人の好奇心と買い気を誘ったことだろう。オルヴィエタン売りの客寄せ芝居を描いた17世紀の版画には、ブルチネルラやブリガンティーネ、盲者といった、コンメディア・デラルテの役どころによる笑劇が描かれているが、その舞台右袖に、オルヴィエタンの効能書きが掲げられている。それによれば、「あらゆる類いの毒、有毒動物や狂犬による咬傷、ペスト、毒虫、天然痘（痘瘡）その他の疾病」に功能があるという。だが、モンドールの霊薬は、さらに脳のぼやけや眩暈、万病の原因のもとである悪気、癲癇、激しいさしこみ、歯痛、船酔いなどにも効力を発揮したという⁽¹⁹⁾。

時代は18世紀中葉となるが、このオルヴィエタン売りについて、フランスの近代バレエを確立した演出家のジャン・ジョルジュ・ノヴェール（1727-1810）は、『ダンスとバレエに関する書簡』（1760年）の中で、次のようなうがった見方をしている⁽²⁰⁾。「道化師とオルヴィエタン売りたちは、彼らが扱うバルサム軟膏より、自らが演ずるバレエの方に大きな期待を寄せている。彼らはまさにアントルシャ（空中で両足を繰り返して交差する動作）によって、民衆の目を引きつけている。そして、薬の売上は、彼らのパフォーマンスの多寡に応じて増減するのだ」（丸括弧内蔵持）。

周知のように、ノヴェールはダンスをして「情熱と習俗・慣行の生きた絵画」と定義し、バレエ

のダンサーたちに歴史や音楽はもとより、神話や解剖学まで学べと唱えている。そこには、啓蒙時代の知の行方が垣間見られるが、はたしてシャルラタンの芸人たちが実際にアントルシャらしき芸を披露していたのか、それとも彼らの大仰な所作を象徴的にそう見立てたのか、そのところは分からない。ただ、少なくともこの《ダンス・ダクシオン（激しく動くダンス）》の提唱者は、オルヴィエタン売りの客寄せ役者が繰り広げる演技のうちに、バレエの技法にも通じる特徴を見抜いていた。つまり、これら役者たちは、バレエ・ダンスの演出法を借用していた。彼はそう言うのである。

ところで、問題のオルヴィエタンは、正統医者をも嫌っていたモリエールが、1665年、ヴェルサイユの国王のために5日で仕上げたとされる戯曲『恋は医者』にも、父親が恋煩いの娘に飲ませる貴重な「万金丹」として登場する⁽²¹⁾。この万能薬は、イタリア中部オルヴィエト出身のクリストファ・コントゥーギが考案し（ルーピ・ドルヴィエトなる人物が発明したとする説もある）、1600年頃、売薬シャルラタンのヒエロニモ・フェランティによって、初めてフランスに持ち込まれたという。呼称はむろん考案者の出身地にちなむ。

だが、ローマでは（？）じつはそれよりかなり以前から用いられていた。また、16世紀後葉にパリ大学医学部が編んだ医薬書『コデックス・メディカメンタリウス』には、冒頭に、並質と上質2種のオルヴィエタンの紹介があり、前者は34通り、後者は25通りの成分からなると記されている⁽²²⁾。成分の多い方が上質とはいささか解せない話だが、のちに上質の成分は27種となる。『コデックス』にはまた、この薬はシャルラタンによって考案された神秘的ないし正体不明な代物であるだけに、かえって病人たちの評判を呼んでいる。それゆえにこそ、組成の内容を明らかにし、安定したものになければならないともある。のちにこれはインチキ薬の代名詞になるのだが、その27種の成分のうちでもっとも重要なのは、古びたテリアカと、心臓・肝臓をつけたまますり潰した毒蛇の粉末だったという⁽²³⁾。

ただ、テリアカ（thériaque）はそれ自体からして、すでにオルヴィエタンやミトリダテスと並ぶ当時の3大解毒剤だった。たとえば、1573年に

ニコラ・オヴェルなるパリの薬剤師が編んだ、『一般的・個別的疑問を含むテリアカ・ミトリダテス論』には、次のように説明されている⁽²⁴⁾。

(・・・) ここで取り上げる解毒剤はテリアカ(theriace)と呼ばれるもので、名称は、ギリシア語で「野獣」や「猛獣」ないし「害獣」を意味するテーリオン(thêrion)に由来する。(中略) 数種の薬草と毒蛇の肉から調合されたこの有名な治療薬は、飲みこんだり、噛まれたり、あるいは刺されたりして体内に入りこんだ毒を制するのに優れた効き目を有している(丸括弧内蔵持)。

一説には、この万能薬にはマムシや松脂、さらに先史時代の洞窟で壁画の顔料としても用いられたオーカー土など、60種以上もの成分が含まれ、調合してから4年後に機能が現れ、12年後にそれが尽きるともいう⁽²⁵⁾。

ちなみに、ミトリダテスとは、ブドウの種を砕いてミルトとワインなどに混ぜ、熱湯で丸一日溶かす。そして糊状になるまで煮こんだ蜂蜜を加え、さらに溶けた樹脂を混ぜ合わせて作った薬だという⁽²⁶⁾。これだけでどこまで解毒効果が得られるのかは不明だが、面白いのはその来歴である。呼称から分かるように、前121年から約60年間、小アジアに覇を唱えたポントス王ミトリダテス六世は、毒殺から我が身を守るため、毎日少しずつ毒を服して耐毒性をつけていった。そのため、前66年、ローマの将軍ポンペイウスに敗れ、クリミア半島に逃れて娘たちともども服毒自殺を図った際、王のみはすでに毒が効かない体となっていて望みを達せず、最終的に家来ないし解放奴隷に命じて首を斬らせたという。毒の量を次第に増して耐性をえる、あの19世紀に考案されたミトリダート法(mithridatism)とは、まさにこの故事に倣った療法にほかならない。

17世紀のパリの医師ピエール＝マルタン・ド・ラ・マルティニエールは、その『解毒剤論』において、オルヴィエタンはテリアカより優れ、テリアカはミトリダテスより優れているが、それはミトリダテスの機能を何ら否定するものではないとしている⁽²⁷⁾。はたして実際はどうだったのか、

もとよりそれを追証するわけにはいかないが、ともあれここでは、これら3大解毒剤が、一種の信仰に近い形で重視されていたことと、それがシャルラタンのみならず、正統を名乗る医師によっても一般に用いられていたことを確認しておこう。

オヴェルはさらに、当時の医師たちがテリアカを水溶液にしたテリアカ水を好んで治療に用いているともしているが、その実効のほどはどうだったのか。しかし、言葉の魔力で聴衆の想像力を喚起し、それを巧みに期待へと変容させて商いをするシャルラタンであってみれば、薬の機能などむしろ二の次だった。してみれば、実際の口上は、筆者の平板な想像力を越え、もっときらびやかな言葉をあれこれ連ねていたはずだ。何しろ彼は、後述する「シャルラタンの王」タバランの紛れもない師匠なのである。口をついて出る言葉に激みなどありえようもない。

そして金曜日ともなれば、モンドールは「芸名」のアナグラムであるロドモン(Rodomont)と自称し、軍隊長に扮して笑劇の特別興行を打ったものだった。舞台には、コンメディ・デラルテのコロンビーネの向こうを張る女形フランシスキヌも、タバランやロドモンが巻き起こすスラップ・スティックなラヴ・コメディに登場した。このフランシスキヌなる役名こそ、ほかならぬタバランの妻の実名だったとされている⁽²⁸⁾。

こうした売薬の技法は、モンドールの独創ではなく、すでに以前から各地でシャルラタンが大なり小なり繰り広げていた。だが、モンドールはそこでの見世物を首都でもっとも殷賑をきわめる場所で、間違いなく一個の「芸」にまで高めた。もとよりそれには、1620年頃からモンドールの片腕として従っていたタバランの異能が大いにものをいったことだろう。しかし、タバランはあくまでも従順だった。その心を、彼は当代一流の戦略的感性によって一篇のソネットに仕上げ、畏敬すべき師に捧げている⁽²⁹⁾。

清水や激流の流れを見なければ、
聳え立つ岩や山に登ればよい。
源がたちどころにわかるはず
水はことごとく丘の高みから下りてくる。
ライン、ポー、そして砂を含んだローヌの大

河も、
すべて山から流れを引き出し、
源泉はアルプスまで遡る。
師よ、あなたはまさに黄金の山であり、
その宝を流してくれる雄弁が、
無数の運河を経てわれわれの魂の中で蒸留する。
黄金の山とは、まことに言い得て妙である。
あなたがまとった徳性が、
われわれのうちに、かくも聖なる炎を産んで
くれるからだ。

モンドールの名前を引き寄せての、いかにも大仰な賛辞である。それはタバランの師に対する傾倒ぶりを端的に物語るが、これとても口上。謳いあげる対象が、薬から生身の人間に替っただけともいえる。

ところで、モンドールと時期を同じくして、パリにはオルヴィエタン売りのシャルラタンがもうひとりいた。名前はデシデリオ・デコンブ。彼もまた、ポン＝ヌフ橋のたもとやドーフィネ広場ないしドーフィネ通りに舞台を仮設し、専属の道化役者グラトゥラルらによる軽演劇の前座と、イタリア訛りの口上とによってかなりの客を集めていた。このモンドールの商売敵についても多くは分かっているが、タバランはその著で、師とデコンブとを比較して、両者の資質の違いを次のように指摘している⁽³⁰⁾。

モンドールは・・・機知に富み、多少とも識字力を備えている。望むなら、もっと誇らしい仕事につくこともできただろう。礼儀作法を弁えてもいる。(・・・) 対するに、デコンブは粗野丸出しで、読み書きもできず、まともな話しさえできない。その話しを少しでも聞けば、彼がもっとも無知なシャルラタンであり、もっとも厚顔な嘘つきだと分かる(傍点蔵持)。

シャルラタンがシャルラタンをいかさま師と断ずる。近親憎悪といえなくもないが、これもまたきわめてシャルラタンの所業といえるのだろう。それにしても、「もっと誇らしい仕事」という文言は気にかかる。タバランはシャルラタンの生業を

一種の賤業とみなしていたのだろうか。この疑問はひとまず措くことにして、ここではこうして弟子から望外の賛辞を奉られたモンドールの素性を調べなければならない。

ありていにいえば、モンドールはイタリア人などではなく、フィリップ・ジラルを本名とするれっきとしたフランス人だった。一説によれば、フランス東部のロレーヌ地方、もしくは生粋のパリ生まれだったともいう。兄弟のアントワヌも、やはりシャルラタンだった(面妖なことに、1994年版の『ロベール人名事典』や小学館の『ロベール仏和大辞典』は、この弟をタバランとしている)。にもかかわらず、フランス人の彼はなぜイタリア人と名乗ったのか。当時、オルヴィエタンを初めとする「名業」の多くが、イタリア産とされていたからである。彼はこうして出自を偽ることで、怪しげな薬の正統性を打ち出した。商品のいかわしさを言葉の魔力で払拭した。まさにこれは、シャルラタン薬売りのきわめて典型的な手法といえる。

では、医者免許は本当か。16世紀から18世紀にかけてパリで繰り広げられた祝祭や遊戯、見世物などを概観した名著『往昔のパリ』の中で、ヴィクトル・フルネルは前述したノルマンディー出身(1574年頃生まれ)のゴールティエ＝ガルグユの娘の洗礼証書に、「内科医(医学博士)」モンドールの名が記されているとする説を紹介している⁽³¹⁾。真偽のほどは分からない。ただ、署名自体、決してありえない話しではない。ゴールティエ＝ガルグユの別れた妻が、じつはタバランとフランシスキューヌとの間にもうけられた(?)、娘レオノールだったとする説もあるからだ。ちなみに、この娘はのちに貴族と再婚したという⁽³²⁾。

モンドールが医者だとする証拠はこれだけである。しかし、しばらくの間行動をとみにし、おそらくその最大の理解者だったタバランがいみじくも記しているように、モンドールは辛うじて読み書きができる程度だった。そんな愛弟子の証言からすれば、とても医者とは思えない。もし彼が真に医者だとすれば、タバランが言うように、「もっと誇らしい仕事」につけたはずである。しかしながら、モンドールは10年あまりパリ市民の耳目を集め続け、1625年にタバランが忽然と姿を消した

後も商売を続けて巨万の富を残した。死後、その遺体は、愛娘が眠るシテ島のサン＝バルテルミー墓地に埋葬されたという。

それにしても、モンドールは一部の他のシャルラタン同様、なぜ首都の真中で白昼堂々と商いが営むことができたのか。17世紀にパリで医業を営んでいたジャン・ベルニエによれば、1607年8月には、ドゥラストルなる偽医者に対する高等法院の判決が下り、その薬のうち、良質なものは慈善院に、残りはすべて焼却処分が付されたという。さらに1年後の1608年8月にも同様の判決があり、ゴンディ通りにあるドゥラストルの家の真向かいに住むピエール・パランの商う薬も、「薬と三束の薪」で燃やされている⁽³³⁾。モンドールがパリで活動を開始した1618年の5月にも、1611年3月に続いて、独占的な外科医＝理髪師組合の特権と権威とを守るため、もぐりの医者、つまりシャルラタンの活動を禁ずる王令が出され、違反者には罰金と治療具の没収という措置がとられている⁽³⁴⁾。

同様の禁令は枚挙に暇もないほど出されているが、シャルラタンに対する批判もまた数多くみられた。その中でとくに有名なものとしては、医師クルヴァルが1610年にパリで著した論駁書『シャルラタンと偽医者に対する揶揄』がある。もともとこれは、1600年頃、王宮の中庭に舞台を組み、火傷用の軟膏を売っていたシニョール・イエロニモ、すなわちオルヴィエタンをフランスに最初に持ちこんだとされる、ヒエロニムス・フェランティを指弾するためのものだった。

オテル・ド・ブルゴーニュ座の道化役者ガリネット・ラ・ガリナや、4人のヴァイオリン弾きを擁していたこのイタリア出身のシャルラタンは、集まった観衆の前にしてローソクで手を焼き、さも大げさに痛がりながら患部に軟膏を塗る。そして2時間後、全快した患部を見せるというパフォーマンスで評判をとっていた。彼はまた、モンドールより10数年前にポン＝ヌフに進出している。そこでは、評判の「火傷芸」に加えて、鳩尾を数度にわたって剣を突き刺し、傷口に軟膏を塗って、翌日、癒合したその傷口を観衆に確かめさせ、薬を売りつけるという、新手の趣向を披露している⁽³⁵⁾。

クルヴァルは言っている。「実際のところ、医術の正統かつ忠実な運用は、健康を保ち、長寿を保証する。ところが、シャルラタヌリ(いい加減さ)と無知と埒の無さとに溢れた医術の不当にして誤った運用は、人体をもはや取り返しのつかないほど危険な状態に追い込むのである」⁽³⁶⁾。そして、「フランス国民へ」と題した次のような諧謔詩をしたためている(4、5、6節省略)⁽³⁷⁾。

- 1 厚顔無恥な詐欺師たるこれら愚かなシャルラタンたちが、
人々をたえず欺くことを座視してはならない。
彼らは甘言を弄して諸君の財産を引き寄せ、
コキュトス(冥界を流れる嘆きの川)の水を
浴びせるのだ。
- 2 これら狡猾な似非科学者たち、このおしゃべりなトリアクル(幻想動物)たちは、
いかなる病も治せると偽る。
だが、これら害毒を流す者たちの最大の秘密は、
財布から金を引き出す錬金術にある。
- 3 (彼らの)証明書は全部が全部値打がなく、
でたらめで取るにたらず、ガラクタで吹けば
飛ぶような代物である。
これら食わせ者たちは、
彼らの陰謀を知らない愚かな民をしばしば騙す。

こうしたクルヴァルの批判は、しかし、さまざまな法的規制と同様に、決してシャルラタンの活動を終息させるには至らなかった。いや、それどころか、12年後に著されるタバランの有名な反論を引き出すための契機となったのだ。近世史家のアンリ・シュルブレも言っている。「ソネ・ド・クルヴァルの風刺はシャルラタンに脅威を与えず、人々にその蒙を理解させることもできなかった。(シャルラタンに対する)彼らの信頼は、むしろ17世紀を通じて日増しに高まっていった。それはまさにフランス全体がこれら偽医者に侵された世紀であり、一部の偽医者はこの治療者という職業のお陰で、かなりたやすく財をなすことができた」⁽³⁸⁾。そして、モンドールについていえば、こうした蓄財によって、ついに貴族の称号と領地を手に入れるまでなのである。

しかし、このことは、シャルラタンの活動が社

会的・政治的に公認された、という事実を決して意味しない。彼らの生業はなおも規制の対象となっており、人々の猜疑心と好奇心を煽ってやまない賤業だった。

では、モンドールの場合はどうだったのか。おそらく彼のシャルラタン稼業を可能にしたのは、「国王の解毒医」という肩書きだった。所詮はそれとても偽称だったはずだが、あるいは彼は、他の多くのシャルラタン同様、何かしらそれを偽証する書状らしきものを携えていたはずである。携えながら、彼は規制の網を巧みに潜り抜けた。その限りにおいて、彼は権威を利用した。いや、利用しつつ、これを嘲笑った。権威の諧謔化と脱聖化。あるいはそうも言えるだろう。弟子タバランはモンドールの間近にいて、まさにそんな処世の術も学んだに違いない。

Ⅲ. 「シャルラタンの王」タバラン

ニコラ・ボワロー、通称ボワロー＝デプレオー（1636－1711）といえば、モリエールやラ・フォンテーヌ、ラシーヌとも親交があった、17世紀のフランスを代表する辛口の風刺家として知られる。その彼をして「アポロンが扮した」と言わしめた、軟膏・薬種売りシャルラタン・タバランの素性は、しかし、明らかに師を凌いだ活躍ぶりほど分かっていない。たとえば生地をナポリとする説もあるが確かとはいえず、本名もイタリア風にヨハン・サロモンとする説と、フランス風にアントワヌ・

ジラルール説とみるがある⁽³⁹⁾。そして、とくにこの後者をとる場合、モンドールと姓を同じくするところから、2人を兄弟とし、したがって、生まれもこの師＝兄同様、ロレーヌ地方ないしパリ出身とする説が出てくる（ちなみに、生年については、前述した『ロベール人名事典』と『ロベール仏和大辞典』は1584年で一致しているが、没年は前者では1660年、後者では1633年となっている）。

ことほどさように、タバランは得体のしれない人物だった。だが、彼はシャルラタン文学の金字塔ともいべき『ファンタジアや対話、逆説、あけすけさ、出会い、笑話、諸概念を含む、タバラン著作の世界的目録』（1622年）⁽⁴⁰⁾ という、いかにも人を食った題名の書をものしてゐる。そこには時代の正統性を才気煥発に揶揄してやまない、じつに研ぎ澄まされた眼差しとしたたかな戦略がみてとれるが、この書を読む限り、彼はきわめて該博な知識の持ち主であり、文章表現力もなかなかのものであることが分かる。明らかにそれは、フランス語を母国語とする者の著作なのだ。にもかかわらず、彼はあえて自分の正体を隠そうとしていた。より適切に言えば、正体隠しを遊ぼうとしていた。

たとえば彼の芸名Tabarinである。この名称は、一般に騎士が鎧の上にまとった陣中着ないしマント（tabart）に由来するとされるが⁽⁴¹⁾、問題なしとしない。語それ自体は、16世紀の年代記者で、ギューエンヌの地方長官もつとめたブレーズ・ド・



ドーフィネ広場でのモンドールとタバランのパフォーマンス。アブラハム・ボスの版画、18世紀。

モンリュクの『断簡集』(1570年)に、「道化」を意味するものとしてすでに初出していたからだ。おそらく彼はこちらを採った⁽⁴²⁾。つまり、自ら道化と名乗ることで、正体を隠した。隠して、それまでの自分と訣別し、犯罪と紙一重のシャルラタン世界に身を投じようとした。徹頭徹尾道化を演じようとした。自らの過去から一切の意味を奪い、トリックスターとしての自分に意味を与えようとした。あるいはそこに、人文主義者ゼバスチャン・ブラントが1494年にストラスブールで刊行した、諸譚の書『愚者(道化)の船』の響みに倣って、すべての人間は愚性を備えた道化とする裏返された平等のアイロニーを仕掛けた。そうとも考えられるのである。その限りにおいて、のちに「道化・悪ふざけ」を指す語として造られたタバリナド(tabarinade)とは、タバランの諸譚精神を忠実に受け継いだものといえるのではないか。

さて、最初のうち小姓ないし下働きとして師モンドールにつかえていたタバランは、遅くとも1620年までには、舞台で道化役を演じ、師の問答の相方をつとめるまでになっていた。そんな彼の出で立ち、『タバラン著作集』(1627年)の口絵に見られるように、マントにゆったりとした幅広のズボン、それに司教帽に似た奇妙な形の帽子。加えて、ネプチューンの三叉の矛を思わせる髭を蓄え、腰には木剣を下げていたという。時には山高帽のようなものもかぶったようだが、いずれにせよ彼は、帽子に一つの重要なメッセージを仮託していた。フランス国立図書館(旧館)には、彼の舞台を描いた版画が何点か保存されているが、そのうちの一葉には、舞台の後幕に次のような文言が記されている。読みようによっては、挑戦的とも愚弄的ともとれる内容である。

世界はシャルラタンの山にすぎない。
タバランがその帽子を振りかざすように、
われらもまた頭を働かせよう。
各人が自らの役を演じ、
タバランより深く考える。
こうして彼よりシャルラタンのとなる者は、
さてお立会い、神の祝福を得ることができる。
アーメン。

だが、このあまりにも過剰すぎる自信ないし倣岸さは、改めて指摘するまでもなく、多くの反撥を買った。これについては、たとえば1619年の彼の書簡形式によるシャルラタン反批判文⁽⁴³⁾が能弁に語っている。まず、そこからみていこう。いささか長い引用になるが、タバランの姿勢が明確に示されている以上、必要箇所まで割愛するわけにはいかない。

2日ほど前、自らの技術を実際に一般人に用いている者たちに対し、某氏が勝手な中傷文を著しています。たとえこの者たちが、中傷文に記された通りだとしましても、あるいはまた、彼らがその敵に憎しみを掻き立てているとしましても、私としては民衆に奉仕するという本質的な望みに突き動かされており、より大きな好奇心を満足させ、人の体の苦しみを軽減することができるようなのすべてを求めかつ認識するため、いかなる刻苦勉強も苦痛も仕事も決して惜しんだことがありません。かかる私であつてみますれば、いかなる場合においても、自分に中傷や非難が向けられるのは不快の極みであり、私の業を求める人々を欺いたり、裏切ったりする意図もまったく持ち合わせておりません。それどころか、自由に言わせてもらえらるなら、私に向けられる賛辞のみならず、私の業から比類のない恩恵を受けた無数の人々からの日々の感謝ですら、含羞の思いに駆られています。

私にとって、それは悪口に対する弁明となるはずです。『シャルラタンたちの(露見した)欺瞞』と題された書が、悪意をもってひとつの目的のためだけに刊行されたことは知っています。その目的とは、私が諸氏から身の丈を越えて賜っている友情を失わせようとするところにあります。しかしながら、私が一切の欺瞞とは無縁であることを知っていただければ、諸氏におかれてはこの無礼を咎め、それが嫉妬に、つまりあからさまかつ意図的な妬みによるもの理解して下さるものと信じてやみません。そして私としましても、もし神意に適いますなら、かかる嫉妬と闘い、全力をあげて諸氏のご厚情に仕え、すべてを諸氏に捧げてきました善人に期待されるすべてのことに対し、精一杯お役に立つ

所存です。

文中の「諸氏」が具体的にだれを指しているかは不明である。だが、「某氏」が前述した『シャルラタンと偽医者に対する揶揄』の著者クルヴァルであることは間違いない。彼が1610年の前作を改稿した『シャルラタンたちの露見したさまざまな欺瞞』⁽⁴⁴⁾を、1619年に発表しているからである。ともあれタバランは、こうしてシャルラタン一般に向けられたはずの批判を自分に引き寄せる。引き寄せて、彼はこれに反撃を加えた。つまり、正統な医者や薬剤師らの批判は、民衆が自分とその業に大いなる期待と賛辞を寄せていることに対する、埒もない「中傷」や「嫉妬」だと断じているのだ。自信と誇りと尊大さ。彼を「シャルラタン王」に仕立てた諧謔精神は、まさにこの本来的に分かち難い三つの心に支えられていた。

一方、前章でとりあげたデゴレースの『シャルラタンの起源や習俗、詐欺、詐称についての陳述』は、タバランとデコンブへの「献辞」こそあるが、内容的にはクルヴァルのシャルラタン批判を継承したものといえる。彼は書いている⁽⁴⁵⁾。

それゆえ、(おお、無知なる民衆よ) 美德が詐欺師を求めておらず、タバランも必要としないことを知らなければならない。医学は美德である。そんな医学をおどけて切り売りしようとするのは、医学を汚すことであり、汚れを蔓延させることでもある。さらにいえば、その破壊にもつながるのだ。こうした医学は野卑な称賛とは徹頭徹尾無縁であり、吝嗇さを排斥しつつ、きわめて重要な存在としてある。そして、喜劇や歌やヴァイオリンを無用としながら、自ら光り輝き、黄金や宝石以上の豊かさを保っているのだ。

デゴレースはまたシャルラタンの騙しの技法について、こうも述べている⁽⁴⁶⁾。

(・・・) シャルラタンのもうひとつのごまかしは、次のような手口からなる。すなわち、舞台上に上る1、2時間前、彼らは舞台に一番近い薬局に駆け込み、砒素化合物を数粒選ん

で、使いを寄越したらこれを渡してくれるよう、薬局主に頼む。こうしておいて、いよいよ彼らは舞台に立ち、自分たちの扱う薬がどれほど優れた解毒剤であるかを自慢し、褒めそやす。それから彼らは下僕ないし助手の1人を薬局に遣わし、予め選んでおいた毒薬を持ってこさせる。そして、見物人の目が集まる舞台の上で、詐欺師は薬箱の蓋に氷砂糖をいくつか綺麗に並べ、それを手にとって見物人たちに見せてから、口に入れる。この氷砂糖は毒薬とかなり似ているため、見物人は本物の毒薬を飲んだと勘違いしてしまう。そこで詐欺師は偽物の毒消しを呑む。これを見て、見物人たちは称賛と驚きを禁じえず、ハンカチーフや手袋にお金を包んで、先を争うようにして投げ入れる。こうして投げ銭が十二分にたまると、シャルラタンは背後のタピストリーの陰に退き、なおも貧しい者たちの無知と愚かしさを愚弄して大笑いするのだ・・・。

はたしてタバランやデコンブを初めとする売薬シャルラタンが、こうした騙しの手法をどこまで駆使していたのかは分からない。この明らかな挑戦に対して、はたしてタバランらがどのような反撃を加えたのかを示す資料も、残念ながら今のところ見当たらない。ともあれ、同様の批判は、とくに医者や薬剤師たちから数多く出されたに違いない。だが、モンドールとともに、ポン＝ヌフ橋やドーフィネ広場の舞台に立って、パリの市民はもとより、貴族やブルジョワたちの関心すら引き付けたとされるタバランにとって、もはやいかなる批判も負け犬の遠吠え以上の意味をもたなかった。何よりも彼には、そうした批判を相手に・・・堂々と反論を展開できるだけの素養と機知があった。いわば彼は、一流であったかどうかはともかく、当時のシャルラタン一般が有する知の体系と騙り＝語りの技法を文学にまで止揚した著述家であり、権威社会に対する批評家でもあったのだ。彼の歴史的名声は、まさにそこに起因していた。少なくとも、単にシャルラタンとしての振舞いにのみ基づく名声ではなかった。

師モンドールを仮想対話の相手として延々と展開する『問答集』(1622年)は、そんな彼の名声を決定づけた著述といえる。今日残っているのは、

1627年にルーアンで刊行された『タバラン著作・幻想全集』（増補版）に収録されたものだが、問答の一部は、実際にドーフィネ広場の舞台にかけられたはずだ。その構成はほぼ一貫していた。まずタバランが師にさまざまな問いをぶつけて大仰かつ正統的な言葉を引き出し、これをしばしば卑近な喩と当意即妙な機知によってやりこめる。つまり、権威＝師と服従＝弟子とが綾なす一種の社会劇を通して、逆さまの知的＝言語世界ないし《コムニタス》（ヴィクター・ターナー）を現出するという、すぐれてカルナヴァルの筋書きになっていたのだ。たとえば問答集の第一問「最高の医者とはだれか。いかにして病を診断するか」において、タバランと師は次のようなやり取りをしている⁽⁴⁷⁾。

師：最高の医者とは、ものの本質を完全に知りぬいている者たち、その特性や組成、構造を弁えている者たち、さらにその気質を知り、そこから自らの考察を立ち上げ、健康にとって何が相応しいかを判断する者たちをいう。私の理解では、理論をもつ者たちはきわめて優れており、理論に基づいて実践と経験を積む者たちは、もろもろの疾病や、己の治療において起きるかもしれない事故に関してより完璧な考えを抱いているところから、最高の医者と思える。医術の本質全体は、まさに経験のうちにあると心得よ。

タバラン：では、先生はどのようにして病気や病人を見分けるのですか？

師：それには、往診して（病人の）脈をとり、体のどこが不調かを尋ね、顔色を判断し、尿を調べ、食欲の有無などを調べるのだ。

「治療において起きるかもしれない事故」とは、いかにも時代を示す文言だが、こうした師の言説全体は、ガレノス流中世医学の桎梏を外れ、近代医学の基本的理論・実践とかなり符合している。このことは、いうまでもなく著者タバランの医学的意識が、単なる偽医者＝シャルラタンの域を越えて、すでにそこまで進んでいたという事実を示している。いわば彼は、自らのうちに中世と近代の2通りの医術を自らのうちに共存させ、これを演劇的に、時にはまた儀礼的に操作しながら、社

会的なトリックスターたろうとしていた。その限りにおいて、彼は、正気と狂気の接点で振舞う道化と同じように、まさに両義的な存在だったともいえる。

さて、戯作者としての彼は、これに続けてかなり奇抜な論理を役者タバランに吐かせる。

「最高の医者」とは樽からワインを小分けにして取り出す「トヌリエ」（字義は「樽職人」）だといふのだ。わけを訊かれて、役者タバランは答える。

トヌリエがワイン樽を調べる際には、中のワインが白いか、明るいか、悪臭がするとか、箍が壊れているかどうかなど尋ねたりはしません。病は内側からでしか分かりませんが、トヌリエは内部を観察するだけです。そのため、彼は樽の上方にある栓を開き、中に鼻を入れます。それから両手で両方の樽底を叩くと、内側から気が立ちあがり、樽の上部から出てきます。こうしてトヌリエはワインの出来不出来を判別するのです。

最高の医者とは、まさにこのトヌリエのように、自らの感性によって病状を判断できる者でなければならない。著者タバランはそう主張するのである。正統医師を演ずる師の高邁な説を卑近な喩によって覆す。そこに立ち現れるのは、ほくそえむ弟子タバランの姿であり、正統医学の権威を足蹴にして聳え立つ、著者タバランの勝ち誇った顔である。もとよりモンドールが、実際に同様の問いかけをされてどう答えるかは不明だが、少なくともこの「師」の役どころは、こうしてつねに揶揄の対象となる権威の象徴としてあった。そこでは師が蒙昧な存在として描かれ、機知に長けた弟子が、むしろ理を説く者に転位している。主客の逆転と正統の脱聖化。問答集の主調と醍醐味はまさにここにある。もはやそこにシャルラタンの世界がもつ危うげなイマジネールはない。いや、むしろ正統をシャルラタンのものとして有徴化してさえいるともいえる。

尊敬おくあたわざる師であるモンドールを、あえて問答の相手として登場させた所以は、おそらくそのあたりにあるのだろう。そして、タバランはそんな問答を舞台にかけ、見物人たちに披露し

た。それを見て、見物人たちはモンドール演じる師を嘲笑い、自分たちと同じ目の高さにある民衆精神の化身タバランを賛美し、やんやの喝采をおくったことだろう。稀代のシャルラタン・タバランは、まことに稀代の演出家であり、卓抜した戦略家でもあった。

興味深いことに、タバランはまた1623年にパリで著された、フランス初のロマン・ピカレスク悪漢小説にも登場している。小説の題名は『今世紀の一部の者たちにみられる数々の欺瞞や繊細さ、不快感、愚行およびその他の悪が素朴なまでに表された、フランシオンの滑稽物語』（全12巻）。著者は、ルイ十三世下のフランス社会を独特の風刺感覚で描き出した、パリ生まれのシャルル・ソレル（1600頃－1674）。著者の前口上によれば、この物語はもともと数年前に他界したある高位の騎士が書き下ろしたものだというのが、そこではリュート（擦弦楽器）によって病を治すとされていたフランシオンなる牧童が、治療を求めにやってきた農民を前にして、次のように高言する箇所がある。「私はフランス各地の町に出没するあの高名なタバラン以上に知者であり、オペラトゥールというよりは、むしろ医者に近い」（48）。

名医（？）であることを宣するのに、タバランを準拠枠として引き合いに出す。それは、改めて指摘するまでもなく、当時、彼が知識人の間でも看過しえぬシャルラタン＝オペラトゥールだったということを端的に示している。だが、牧童が実際に治療・売薬を行うことはもとより許されず、だとすれば、著者の意図はともあれ、フランシオン自身、シャルラタンないしその同類にほかならなかった。それは、主人公フランシオンの次のような言葉からも明らかである。「私は騎士道のために兵士たちを治し、神の名誉のために貧者たちを、そして金のために金持ちの商人たちを治す。（・・・）あなたがたは何かほかにこれといった薬がないか尋ねておられる。もっています。美肌用のクリームを。それは雪のように白く、バルサム（芳香性植物樹脂）や麝香のように芳香を發します。（・・・）傷によく効く軟膏ももっています。だれか怪我した者がいれば、たちどころに治してみせます。私は医者ではなく、博士でも哲学者でもありません。しかしながら、私の軟膏は哲学者や

博士や医者に決してひけをとるものではありません。経験は知識に勝り、実践は理論以上のものです」（49）。

おそらく、引用文中の「私」をシャルラタンと置きかえれば、これもまたシャルラタン現象のすぐれて文学的な紹介ということになるが、こうした大仰な言葉遣いは、シャルラタン独特の口上を彷彿とさせる。何よりもそこには、正統なるものが紡いでやまない風景に決然と開き直った、一種の諧謔精神が克明にみてとれるからだ。

ともあれ、こうして才気煥発な書をものし、他人の小説にまでその名が登場するようになったタバランは、しかし『問答集』を編んだ3年後、つまり1625年のある日、忽然とパリから姿をくらます。なぜか。10年間のシャルラタン稼業で5万エキュも蓄財したドウニ・レスコほどではないまでも（50）、モンドール同様、かなりの富を蓄えてパリ近郊に領主所領を手に入れたためか、それとも堅い絆で結ばれていたはずの師との間に、何かしら離反を余儀なくするような亀裂が入ったためか。理由は不明である。確かなのは、やがて田園に移り住んだにもかかわらず、贅沢三昧の生活が隣人たちの妬みを買ひ、1633年8月以前、彼らの誘いに乗って狩りにでかけ、その中の1人に言いがかりをつけられてついに刺殺された、ということである（51）。

ボン＝ヌフとドーフィネ広場は、こうして「シャルラタンの王」を失う。たしかにそれはシャルラタンたちだけでなく、パリ市民にとっても大きな痛手となった。タバランが彼らの不平不満のまたとない代弁者であり、口上と笑劇と多少とも怪しげな薬によって非日常の夢をつないでくれる、まれに見るトリックスターでもあったからだ。そして、モンドールにとっても、相方の失踪は大きな打撃となった。たしかに彼は、さらにそれから10年間、パデルなる男を代役に立てて笑劇を上演し、薬を売り続けたが、偉大な弟子の失踪によって失った客は、二度と戻ってはこなかった（52）。「金の山」とは、まさにタバラン自身にほかならなかった。この事実を、はたしてモンドールはどう受け止めたのだろうか。

おわりにかえて

以上、縷々紹介したモンドールとタバランは、彼らの後継者ともいうべき18世紀前葉の売薬シャルラタンであるグラン・トマ（字義は「偉大なトマ」）同様、俗に「星の数ほどいた」と言われる同輩たちの中で際立った存在だった。詳細はいずれ上梓される予定の拙著に譲るほかないが、フランス各地の古文書館に記録が残るほとんどのシャルラタンたちは、たえず治安・行政当局や同業組合の指弾を受け、その行動がスキャンダラスなものとして告発の対象となっていた。告発されて、投獄された者も決して少なくなかった。だが、それでも彼らは生きぬいた。なぜか。彼らのしたたかさに理由の一端を求めることはできるが、もとよりそれで能事足りりとするわけにはいかない。権力側の目と民衆側のそれが必ずしも一致していなかった。まさにそこに彼らが存在しうる間隙があった。事実、民衆にとってみれば、前述したように、鑑札の有無などは権力側が問題視するほどのことではなかったのだ。

しかもシャルラタンは、近代へと向かう社会の日常を祝祭化してくれた。彼らシャルラタンの歴史的意味は、たしかにそこにある。しかし、それだけではなかった。たとえば彼らと行動を共にし、客寄せの前座芝居を任されていた、コンメディア・デラルテやフランスの芸人たちは、各地を巡りながら、モリエールらの専門的な旅一座とは異なる形で、民衆演劇の基盤を確実に醸成していった。そんな芸人たちの中からは、オテル・ド・ブルゴーニュ座を初めとするパリの常設館に進出し、ついに看板役者にまで出世した者もいた。その代表格が、前述したゴールティエ＝ガルギユらのいわゆる喜劇三羽鳥である。

さらに、彼らシャルラタンの存在と言動は、多くの文学作品に題材を提供しただけでなく、すぐれて反体制的な風刺的な、いわゆる《シャルラタン文学》を生み出してもいった。前述したタバランの『世界的目録』などは、さしずめその典型といえる。そういえば、フランス・ルネサンスが生んだあの驚天動地の飽食文学『ガルガンチュワとパンタグリユエル物語』も、こうした諧謔文学の範疇に入れば一層の理解がいくだろう。

シャルラタンが怪しげな腕前や薬の機能を際限

なく誇張したのと同様に、ラブレーもまた、自らの諧謔的イマジネールを自由闊達に駆使し、猥雑な言葉の含意を極限まで拡大して一個の文学に仕立て上げた。仕立て上げることで、修道士であり、正統医師でもあった自らの正統性を果敢に逸脱しようとした。その限りにおいて、彼はまさにシャルラタン精神の申し子ともいえる。そんな自分の作品を汚穢下賤な売神の書と難じたジュネーヴのカルヴァンを、彼はおそらく当時シャルラタンと同じ意味で用いられていた「詐欺師」(emposteur > imposteur) と断じている⁽⁵³⁾。あるいはラブレーは、かつて同士だったこの宗教的指導者のうちに、一種のシャルラタン性を看破していたのかもしれない。むしろそれは、ラブレーのとは随分と異質なものであったはずだが・・・。

そして最後に、こうした対抗文化の担い手ともいうべきシャルラタンたちの存在は、彼らを職能組合から排除し、あるいは明確な一線を画そうとする正統な医師や薬剤師たちの危機意識を助長し、なおも中世医術が幅を利かせていた大学医学部や医・薬学校の教育システムを整備させ、結果的に医学や薬学のさらなる精緻化や構造化を、つまり近代化を促した。

このようにみてくれば、もはやシャルラタンをして文化英雄と呼ぶのに何の差し障りもないといえる。シャルラタンが生きた時代とは、畢竟するところ正統と異端の二分法的構造がせめぎあう時代の謂であり、まさに前者が後者によって真に成り立ちうるという社会の力学を、改めて顕在化した時代でもあった。そして、さまざまな領域に及ぶこの脱聖化のプロセスが、たとえ部分的にであれ、フランス社会の近代化を立ち上げたのだ。たとえば、中世の黒死病が、結果的に近代の予防医学や都市改造を招来したように、である。

だが、やがてシャルラタンの医者や売薬人は、フランス革命時に国家的な規制を受けて急速に衰えていく。革命政府が各県知事に正統医師や薬剤師のリストを作成させ、そこに名前の載らない者をシャルラタンとして、活動を禁止させたのである。ところが、ここに奇妙な事態が発生する。それまで正統をもって任じていた医師や薬剤師のうち、拙い施術を行ったり、効果の乏しい薬を商う者たちが、民衆からシャルラタンの烙印を押され

るようになった。つまり、民衆は、かつて正統なる権力が正統ならざる医・薬業者をシャルラタンと断じたように、正統なる医師や薬剤師をシャルラタンと呼ぶようになったのだ。

そして、こうした民衆言語の用語法は、20世紀に入ってさらに新たな意味を獲得し、一部の無責任で怪しげな政治家や教育者にまで及ぶようになる。しかし、これら新しい「異形」のシャルラタンたちに、時代を祝祭化する力はなく、民衆からもはや蔑み以上の想いを寄せられることもない。正統たるべき権力のシャルラタン化、あるいはシャルラタンの最終的な脱聖化。あえていえばそうなるだろう。してみれば、歴史の奇矯はまさにここに尽きるといえる。

註 (イタリック体の出典は論文、BMMはモンペリエ市立図書館、ADHはエロー県立古文書館、BMはマザリヌ図書館を指す)

- (1) 拙論「パロディック・リアリズム — フリークス論」、《体育の科学》第47巻第7号、1987年、500頁以下参照。なお、この拙論は、本論「おわりにかえて」に言及のあるグラン・トマを扱ったものである。
- (2) ちなみに、語源学に巨歩を記しデュ・カンジュは、さらにラテン語のceretanus (薬の行商人) もシャルラタンの語源として挙げている (Dominio DU CANGE : Glossarium mediae et infimae latinitatis, t. II, Didot Freres, Paris, 1842, p. 293)。中には、ミストラルのプロヴァンス＝フランス語辞典『フェリブリージュ宝典』ように、語源をイタリア語のciarlare「話す」に求める説もある (Frédéric MISTRAL: Lou Trésor dóu Félibrige, 1878, Culture Provençal et Méditerranéenne, Raphèle-lès-Arles, 1979, p. 533)。なお、ミストラルはシャルラタンの同義語として、ラテン語のalazon (法螺吹き、偽善家) から派生したプロヴァンス語のalantaを挙げている (ibid., p. 64)。一風変わっているのは、K. H. マンジュ (Manges) と A. R. ニクル (Nykl) の仮説で、彼らは ciarlatano の語源をトルコ語の動詞 dzar-la ないし名詞 dzarlamak に求めている (Jean-Claude MARGOLIN: *Sur quelques figures de charlatans à la Renaissance*, in «Devins et charlatans au temps de la Renaissance», Centre de Recherches sur la Renaissance, Univ. de Paris-Sorbonne, Paris, 1979, p. 38)。
- (3) DESGORRÈS: De l'origine, mœurs, fraudes et impostures des Charlatans, in Oeuvres complètes de Tabarin, t. I, éd. par Gustave AVENTIN, P. Jannet, Paris, 1858, p. 249.
- (4) Jacques AMYOT: Les vies des hommes illustrés..., 1567 (Albert DAUZAT et als.: Dictionnaire étymologique et historique du français, Larousse, Paris, 1963/1993, p. 143). Algirdas J. GREIMAS と Teresa M. KEANE は、『中世フランス語辞典』(Dictionnaire du moyen français, Larousse, Paris, 1992, p. 105) の中で、同じアミヨが1572年に著した『プルタルク著作集』(Oeuvres de Plutarque) を初出としている。
- (5) C.N.R.S.(éd.) : Dictionnaire de la langue du 19^e et du 20^e siècle, Klincksieck, Paris, 1977, p. 557.
- (6) Walter VON WARTBURG : Französisches Etymologisches Wörterbuch, B. II, J.C. B. Mohr, Tübingen, 1940, p. 607.
- (7) MISTRAL, op. cit., p. 64.
- (8) シャルラタンの用語法に関する以下の記述は、Edmond HUGUET : Dictionnaire de la langue française du seizième siècle, t. II, Ancienne Honoré Champion, Paris, 1932, p. 203 や、Frédéric GODEFROY : Dictionnaire de l'ancienne langue française et tous ses dialectes du IX^e au XV^e siècles, t. 10, Lib. des Sciences et des Arts, Paris, 1938 による。また、Guillaume BOUCHET: Les Séree, t. II, Poitiers, 1584, p. 217; Philippe de MARNIX: Tableau de la différence entre la religion chrétienne et le papisme, liv. I,

- t. IV, Lyde, 1599, p. 7; Etienne PASQUIER: Lettres, Amsterdam, t. X, 1723, p. 7; André THEVET: Cosmographie universelle, t. X, 1571, p. 10; Pierre LE LOYER: Discours et histoire des spectres, t. VIII, Paris, 1608, p. 11なども参照されたい。
- (9) Jean BODIN: Les six livres de la République, 1583, éd. et prés. de G. MEIRET, Livre de Poche, Paris, 1993.
- (10) VON WARTBURG, op. cit.
- (11) 前記語源辞典には漏れているが、17世紀の派生語としては、たとえばアグリッパ・ド・ヴィニエの『世界史』第14巻に、[(演説家の)欺瞞]を指すために用いたシャルルリ charlerieが知られているにすぎない (Agrippa D'AUBIGNÉ: Histoire universelle, t. IX, 1594-1602, Liv. 14, chap. 24 / éd. et notes de André THIERS, Daroz, Genève, 1995, p. 175)。
- (12) I.D.P.M.O.D.R (Jean DESGORRÈS): Discours de l'origine des mœurs, fraudes et impostures des Ciarlatans, avec leur descouverte. Dedié à Tabarin & Desiderio de Combes, Denys Langlois, Paris, 1622, p. 1. (BM 27024)
- (13) BERTHOD: La Ville de Paris en vers burlesque (d'après Michel RENAUD: *Beteleurs et charlatans au XVIII^e siècle*, in «GAVROCHE», No. 8, fév.-mars 1983, p. 9)。
- (14) カトゥーシュについては、たとえば Maurice PLOBERG : De la Cour des Miracles au Gibet de Monfaucon, J. Naertm, Paris, 1928, pp. 113 sq. 参照。
- (15) Pont-Neuf 1578-1978, Exposition organisée par le Musée Carnavalet et la Délégation à l'Action artistique de la Ville de Paris, 1978, p. 7.
- (16) Victor FOURNEL: Les rues du vieux Paris, Lib. de Firmin-Didot, Paris, 1881, p. 524.
- (17) 当初、イタリアで「コンメディア・アリンプロヴィソ (即興喜劇)」と呼ばれていたコンメディア・デラルテは、16世紀初頭にフランスに進出し、1530年には「イタリア人アンドレ師」なる人物 (とその一座) が、アンリ八世とフランス王室のために笑劇を制作・上演する条件で、パリ市当局に召抱えられていたという。また、1549年には、リヨンでイタリア人一座による興行が打たれたとの記録もある (Winifred SMITH : The Commedia dell'Arte, Benjamin Blom, New York & London, 1964, p. 142.)。だが、16世紀も半ばをすぎると、パリの高等法院は、禁令こそ出さなかったものの、コメディ・イタリアンに属する役者たちが放縦かつ怠惰であり、若者たちに悪影響を及ぼすとして、基本的にこれに厳しい態度をとった。事実、1570年、カトリヌ・ド・メディシスは故国から芸人たちを招こうとしたが、高等法院の妨害にあつてその願いを放棄させられている。そして6年後、アンリ三世は母後のたつての願いを聞き入れ、有名なゲロジ一座を呼ぶことにした。だが、この招聘はまさにドラマティックなものであった。すなわち、フランスに来る途中、一座はユグノー教徒に捕われ、座員の2人がプロテスタントに改宗したのち、国王が身代金を払ってようやく解放されたのである (Napoléon-Maurice BERNARDIN: La Comédie italienne en France et les théâtres de la foire et du boulevard, Paris, 1902, pp. 8-12)。
- (18) John GRAND-CARTERET: L'histoire, la vie, les mœurs et la curiosité, III, Librairie de La Curiosité et des Beaux-Arts, Paris, 1928, pp. 267-268. なお、18世紀中葉に刊行された『フランスにおけるイタリア演劇今昔』によれば、イタリア人芸人たちは1577年にはじめてフランスに現れたが、1697年にはその活動が禁止されるようになったという (Auteurs de l'Histoire du Théâtre François : Histoire de l'ancien Théâtre Italien, depuis son origine en France jusqu'à sa suppression en l'année 1697, Lambert, Paris, 1753, p. viii.)。

- (19) Michel SELIMONTE: *Le Pont Neuf et ses charlatans*, Plasma, Paris, 1980, s. p.
- (20) Jean Georges NOVERRE: *Lettres sur la danse, et sur les ballets*, Aimé Delaroché, Lyon, 1760, p. 48. (BMM 42801)
- (21) モリエール全集I『恋は医者』鈴木力衛訳、中央公論社、1973年、183-184頁。モリエールはシャルラタン（香具師）にこう言わせ（歌わせ）ている。「海をとりまく国ぐにの、あらゆる黄金を積まれても、／霊妙不思議なこの薬、どっこい渡してなるものか。／類いまれなるその効き目、治した病気は数知れず、／一年かかって数えても、とうてい数えきれやせぬ。／ひぜん／疥癬／たむしに熱病、／ペスト／痛風、／梅毒はおろか、／脱腸／はしかでさえもぴたりと治る／ああ、ありがたき万金丹！」（丸括弧内蔵持）。
- (22) J. BERGOUNIOUX : *Les éditions du Codex Medicamentarius de l'ancienne Faculté de Médecine de Paris*, in «Bulletin de la Société d'Histoire de la Pharmacie», Société de la Pharmacie, Paris, 1928, p. 33.
- (23) FRANKLIN, op. cit., t. 2, p. 528.
- (24) Nicolas HOVEL: *Traité de la Thériaque et Mithridat*, contenant plusieurs questions générales & particulières, Jean de Bordeaux, Paris, 1573, chap. I, p. iv. (BM29889)
- (25) F・クライン＝ルブール『パリ職人づくし』、北澤真木訳、論創社、1995年、140頁。
- (26) HOVEL., Ibid., p. 146r.
- (27) Françoise LOUX: Pierre-Martin de LA MARTINIÈRE. Un médecin au XVII^e siècle, Imago, Paris, 1988, p. 196.
- (28) GRAND-CARTERET, op. cit., p. 269.
- (29) TABARIN : *Oeuvres complètes de Tabarin*, op. cit., p. 10.
- (30) DESGORRÈS, op. cit., V. t. 2, p. 287.
- (31) FOURNEL: *Le vieux Paris*, A. Mame et Fils, Tours, 1887, p. 204.
- (32) G. AVENTIN: *Fantaisie tabarinesque*, in *Oeuvres complètes de Tabarin*, op. cit., p.x.
- (33) H. SULBLÉ : *Quelques charlatans célèbres au XVII^e siècle*, E.-H. Gitard, Toulouse, 1922 (d'après Jean BERNIER: *Essai de médecine où il est traité de l'histoire de la médecine et des médecins*, S. Languronne, 1689), pp. 36-37.
- (34) ADH 4H12-142.
- (35) COURVAL: *Satyre contre les charlatans et pseudo-médecins empiriques en laquelle sont amplement découvertes les ruses et tromperies de tous Thériacleurs, Alchimistes, Chimistes, Paracelistes, Destilateurs, Ex-Tracteurs de Quintessences, Fondeurs dorportable, Maistres de l'Elixir...et telle pernicieuse engeance d'imposeurs*, en laquelle d'ailleurs sont refutés les erreurs, abus et impiétés des Iatromages, ou médecins et autres d'étestables et diaboliques remèdes, en la cure des maladies, Milot, Paris, 1610, p. 10. (BMM 76437RES) およびSELIMONTE, op. cit., s. p. なお、シャルラタンによる同様の火傷芸は、イエロニモの後も受け継がれ、たとえば1703年には、イタリアのモデナで、フランカトリッパなる男が、熱した松脂で背中を焼き、自慢の火傷薬の機能を立証しようとしたという (Constant MIC: *La Commedia dell'Arte*, Pléiade, Paris, 1927, p. 181)
- (36) Ibid., p. 24.
- (37) Ibid., p. iij.
- (38) SULBLÉ, op. cit., p. 22.
- (39) RENAUD, *Bateleurs et charlatans au XVIII^e siècle*, in «GAVROCHE», No. 8, fév.-mars 1983, p. 9.
- (40) *Inventaire Universel des œuvres de Tabarin* contenant ses fantaisies, dialogues, paradoxes, gaillardies, rencontres, farces et conceptions, P. Recollet et A. Estoc, Paris, 1622. (BMM 33372)

- (41) RENAUD, op. cit., p. 8.
- (42) 『タバラン著作集』の編者ギュスタヴ・アヴァンタンは、Tabarinの語源として次の4通りを挙げている。①ラテン語taberna「小屋、露店」、②ラテン語tabes「疫病、蛇の毒液」③ラテン語taurus<ギリシア語taûros「(雄)牛」④Tabarinos「テーバイの旧都市名」(AVENTIN, op. cit., p. 207)。こうした語は、しかしすでに通用していたtabarin「道化」という語とタバランの結びつきほど直截的ではなく、何よりも諧謔的ではない。
- (43) TABARIN: La réponse du Sieur Tabarin au livre intitulé La Tromperie des Charlatans découverte, S. Moreau, Paris, 1619, in Inventaire Universel des Œuvres de Tabarin, op. cit., pp. 221-222.
- (44) COURVAL : Les tromperies des Charlatans découvertes, N. Rousset, Paris, 1619, in Inventaire Universel des Œuvres de Tabarin, ibid., pp. 205-217. クールヴァルはこの論駁書を次のような言葉で締めくくっている。「彼ら(テリアカ薬売りやシャルラタンたち)は、甘言のみならず、外見の美しい気取った戯言を弄して(人々を)騙している。まさにそれは贋金作りと同じであり、その驚異の薬はみかけこそ立派だが、使っても何ら価値のない代物なのである」(p. 217)。
- (45) I.D.P.M.O.D.R (DESGORRÈ), op. cit., p. 7.
- (46) Ibid., p. 32.
- (47) Recueil général des œuvres et fantaisies de Tabarin, concernant ses rencontres, questions & demandes facétieuses, avec leurs responses. Rouen, D. Geuffroy, 1627, pp. 2-4. (BMM L. 169)
- (48) Charles SOREL: L'histoire comique de Francion où les Tromperies, les Subtilitez, les mauvaises humeurs, les sottises & tous les autres vices de quelques personnes de ce siècle sont naïvement representez, Louys Boulanger, Paris, 1623/1636, p. 743.
- (49) Ibid., pp. 790-791.
- (50) 「タバランとモンドールがパリでどれほど荒稼ぎをしたかは、だれもが知っているところである」(DESGORRÈS, op. cit. p. 273)。
- (51) Roland AUGUET: Fêtes et spectacles populaires, Flammarion, Paris, 1974, p. 43などを参照されたい。
- (52) Dr. GUILLEMET: *Le charlatan à travers les âges, discours prononcé dans la séance du 23 novembre 1891*, in «Revue Scientifique», 3^e série, 28^e année, Nantes, 1891, p. 9. (BM 57808)
- (53) 渡辺一夫『フランス・ルネサンスの人々』、白水社、1997年、152頁。